16　「徒然草」兼好法師 ─中世の随筆

20年度　明治学院大学

★　次の文章を読み、後の問に答えよ。

　宇治に住み侍りけるをのこ、京に、とて、１なまめきたるの僧を、こじうとなりければ、常に申しむつびけり。或時、迎へに馬をしたりければ、「遥かなるほどなり。きのをのこに、先づせさせよ」とて、酒を出したれば、さし受けさし受け、よよと飲みぬ。太刀うちはきて、かひがひしげなれば、たのもしく覚えて、召し具して行くほどに、のほどにて、法師のあまた具してあひたるに、この男立ちむかひて、「日暮れにたる山中に、２あやしきぞ。とまり候へ」と言ひて、太刀を引き抜きければ、人も皆太刀抜き、げなどしけるを、具覚房、手をすりて、「３うつし心なくひたる者に候。まげて４許し給はらん」と言ひければ、りて過ぎぬ。この男具覚房にあひて、「はしき事し給ひつるものかな。おのれ酔ひたる事侍らず。らんとするを、抜ける太刀むなしくなし給ひつること」と怒りて、ひた斬りに斬りおとしつ。さて、「あり」とののしりければ、おこりて出であへば、「５我こそ山賊よ」と言ひて、走りかかりつつ斬りまはりけるを、あまたして手負ほせ、打ち伏せてしばりけり。馬は血つきて、宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、をのこどもあまた走らかしたれば、具覚房は、くちなし原にによひ伏したるを、求め出でてかきもて来つ。

注一　口づきの　　馬の口を引いていく

注二　奈良法師　　奈良の東大寺・興福寺などの僧

注三　矢はげ　　　矢をつがえること

問１　傍線部１「なまめきたる」の意味としてもっとも適切なものを次から選べ。

イ　浮気がちな　　ロ　俗世的な　　ハ　権力志向の強い

ニ　奇抜な　　　　ホ　上品な

問２　傍線部２「あやしきぞ。とまり候へ」と声を掛けたのはなぜか。もっとも適切なものを次から選べ。

イ　酒に酔わない男とは対照的に、僧兵たちは泥酔していたから。

ロ　相手が法師に偽装した武士であることを見破り、見逃すわけにはいかなかったから。

ハ　酒気を帯びた主人を守れる人がほかにいなかったから。

ニ　判断力を欠いて僧兵に絡むほど、男は泥酔してしまっていたから。

ホ　いくら警固を多くつけても、夜間の山中では武器をすぐ使えるよう備えないと危険だから。

問３　傍線部３「うつし心」の意味としてもっとも適切な漢字二字を考えて答えよ。

　　［　　　　　　　　　　］

問４　傍線部４「許し給はらん」の意味としてもっとも適切なものを次から選べ。

イ　許して差し上げましょう

ロ　許すのではないでしょうか

ハ　お許し頂いたであろうと思います

ニ　お許し頂きたいものです

ホ　許すことはきっとないでしょう

問５　傍線部５「我」とは誰か。文中から三字以内で抜き出して答えよ。

　　［　　　　　　　　　　］

◎問６　この問題文の冒頭に教訓を掲げるとすれば何か。十字以内で答えよ。

　　［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

【解答】

問１　ホ

問２　ニ

問３　正気

問４　ニ

問５　この男〔「男」でも可。〕

問６　Ａ安易にＢ酒を勧めるな（９字）

評価の基準　Ａ＝３／Ｂ＝７

　　　［別解］酒を勧める相手を選べ（10字）

【現代語訳】

　宇治に住んでおりました男が、京に（住む）、具覚坊といって、上品な、俗世間をのがれた僧を、妻の兄弟だったので、いつもお話して親しくしていた。あるとき、（具覚坊を）迎えに馬をやったところ、（具覚坊は）「ずっと遠い道のりである。馬の口を引いていく男に、まず一杯飲ませてやれ」と言って、酒を出したので、（その男は何杯も）受け受けして、ぐいぐいと飲んだ。（その後、男は）太刀をさっと腰につけて、てきぱきとして力強そうな様子なので、（具覚坊は）心強く思われて、召し連れて行くうちに、木幡のあたりで、奈良法師が武装した兵をたくさん連れて（具覚坊一行に）出会ったところ、この男が立ち向かって、「日が暮れてしまった山の中で、不審なことだ。止まりなさい」と言って、太刀を引き抜いたので、（相手の）人も皆太刀を抜き、矢をつがえるなどしたので、具覚坊は、両手を擦り合わせて、「正気なく酔った者でございます。ぜひともお許しいただきたい（ものです）」と言ったので、（相手の）皆々はあざけり笑って通り過ぎてしまった。この男は具覚坊に向かって、「お坊さまは情けないことをなさったものだなあ。私は酔っていることはありません。手柄をお立てしようとしましたのに、抜いた太刀を無駄になさいましたことよ」と怒って、（具覚坊を）めった斬りに斬り倒した。そうして、「山賊がいる」と大声でわめいたので、里に住む人々が大挙して立ち向かったところ、「自分こそが山賊よ」と言って、走りかかっては斬り回ったので、（里の人々は）大勢で（男に）傷を負わせ、打ち倒して縛った。（具覚坊が乗っていた）馬は血をつけて、宇治の大路の家に駆け込んだ。（宇治の男が）驚きあきれて、召し使いの男たちを大勢走らせたところ、具覚坊が、くちなし原にうめき伏しているところを、捜し出して担いで（帰って）来た。